The Japanese Association for Behavior Analysis(JABA)

日本行動分析学会 第29回年次大会 大会企画シンポジウム(一般公開)
(2011年9月18・19日 早稲田大学)

行動分析学のさらなる発展のために

-さまざまな介入場面から考えられること-

For the future development of Behavior Analysis

シンポジスト 熊野宏昭(早稲田大学人間科学学術院) 野口美幸 (名古屋女子大学)
原井宏明(なごやメンタルクリニック)
指定討論者 大河内浩人(大阪教育大学)
司会 福井至(東京家政大学)

Symposiasts: Hiroaki Kumano, (Waseda University) Miyuki Noguchi, (Nagoya Women's University) Hiroaki Harai (Nagoya Mental Clinic)
Discussants: Hiroto Okouchi, (Osaka Kyoiku University)

keywords : Theory of Behavior Analysis, Future development

B.F.スキナーに始まる実験的行動分析、応用行動分析、理論行動分析の研究は、教育、療育、医学、マネージメント等各種領域に多大な影響を及ぼし、各種適応行動を獲得するための最適なプロセスをいくつも発見してきた。しかし、上記の各領域においては行動分析学とその他の知見も含め、それぞれ独自の方法論を発展させており、行動分析学が現状においてどのように利用されているか俯瞰できる機会は少ない。また、実験的行動分析と応用行動分析の乖離が指摘されたこともあったが、それ以上に実験的行動分析と実際に応用されている上記各領域では乖離していることも考えられる。応用領域において、こういった基礎的実験の結果や明確な理論がほしいと思っていても、それが見つからず、一方ではそういった基礎的な研究が実は地道に行われており、明確な理論が有名になっていなくてもすでにできているといった可能性も考えられる。そこで、本シンポジウムにおいては、看護リハビリ分野、療育分野、心身医学分野、精神医学分野で現在行動分析学がどのように応用されており、その応用の仕方の共通点と違いを検討すること、また応用分野で望まれる基礎的実験結果や理論についてシンポジストの方に提言いただき、フロアーの方からは実験的行動分析の新たな知見の応用可能性を応用領域の方に伝えていただくといった、基礎研究分野と応用領域との乖離を縮める一助となるようなシンポジウムとしたい。

シンポジストとしては、心理療法の分野では、認知行動療法の第3の波として台頭著しいAcceptance and Commitment Therapy(以下ACTと略記する)という療法があるが、この開発者Steven Hayes教授は、子どものオペラント行動の研究から始め成人の精神障害の治療法を作り上げた先生であり、その理論の元には行動分析学の知見が存在している。またこのACTは森田療法との類似点も指摘されており、そのような心理療法と心身医学の幅広い視点から早稲田大学人間科学学術院熊野宏昭先生に、行動分析学の意義と将来展望についてご発表いただくこととした。また、また、旧来から応用行動分析が幅広く利用されてきた療育分野から名古屋女子大学野口美幸先生の先生方にご発表いただく。さらに、行動療法という名称の始まりである1953年スキナーの行動療法研究以来関わりの深い、精神医学分野からなごやメンタルクリニックの原井宏明先生にご発表いただく。

また指定討論者としては、行動分析学を基盤として心理療法を統合的に理解する機能分析心理療法の立場から、大阪教育大学の大河内浩人先生に討論していただく。

心身医学分野 熊野宏昭(早稲田大学人間科学学術院)

心身医学分野では、治療者は外来で会う患者の行動の強化随伴性に対して面接場面以外では直接コントロール力を持たず、通常言語的な介入に頼っている。そのため、実験的行動分析の知見を活用するためには、ルール支配行動、刺激等価性、派生的刺激関係などの言語や認知に関る基礎研究の成果が蓄積され、関係フレームづけが定式化されるのを待つ必要があった。今回は糖尿病へのACTの適用を例に、臨床行動分析の効用を論じてみたい。

療育分野 野口美幸 (名古屋女子大学)

療育分野においては行動分析が広く応用されている。療育施設や特別支援教育などさまざまな場面で、自閉症をはじめとする発達障害や近年では知的障害を伴わない発達障害にも適用されている。シンポジウムでは、発達障害の児童を対象に行動分析に基づく介入を行ったケースを紹介し、介入方法および実験デザインの観点から療育分野独自の特徴と他の分野と共通する特徴を論じてゆく。また、即時小強化・遅延大強化や選択行動に関する研究の知見を、療育に生かす可能性について議論を行いたい。

精神医学分野 原井宏明(なごやメンタルクリニック)

行動分析学を精神医学の領域に応用した人物にN. Azrinを忘れることはできない。州立精神病院の慢性患者にトークンエコノミーを行い，患者家族に“互酬性カウンセリング”を教え，チック障害にハビットリバーサルで効果を上げ，アルコール依存症に対するCRA(Community Reinforcement Approach)で他にはない頑健なエビデンスをもたらした。全て1960年代からの仕事である。

この50年間，精神医学・医療は急速に広がり，一般化した。一方，今日の日本精神神経学会のサイトを検索すると“行動分析”は1件だけ，しかも学会名としてしかヒットしない。精神医学の拡大は薬物療法と認知行動療法の拡大と相関している。相対的にAzrinの功績は忘れされつつある。“EBM”がない時代にAzrinが始めたものに今日，どれだけのエビデンスがあるかを紹介する。

NII-Electronic Library Service